



郷土史

ていね

第 83 号
平成 26 年 11 月 12 日
手稲郷土史研究会会報

第 102 回(平成 26 年 10 月 8 日)定例会の講演要旨

国鉄時代のうら話 ～あんなこと・こんなこと～

前田 佐藤 至 氏

明治 5 年、日本ではじめて新橋～東京・次に神戸～横浜・に汽車が走った。北海道は 3 番目で、明治 13 年 11 月 28 日に手宮～札幌間が開通したという。以来、鉄道は北海道の発展と共に歩み、北海道の開拓に大きな役割を果たしてきた。昭和 30 年代の高度成長期には石炭輸送に全力を注ぎ、札幌は北海道の中心都市として大発展を遂げ、昭和 47 年に政令都市となった。しかし、大都市以外は過疎化が進み、加えて石炭産業は凋落の一途をたどっていった。私は、昭和 28 年に静内機関区に採用され、昭和 31 年に追分の大機関区に移り、主に石炭列車を産炭地から室蘭港まで運んだ。



当時の札幌圏は急激な人口増と共に輸送力も増加、これに対応すべく、昭和 40 年に手稲町に国鉄札幌運転所が開設された。昭和 43 年の電化に伴い、札幌運転所に移り旅客専門の輸送に当たった。顧みて私の国鉄人生は、まさしくこの時期に当たり、転々と渡り歩いたことになる。今般は、私が経験した中から一般には知られていない「裏話」をさせていただいた。

1、「はじめに」

ひょうきんなことから国鉄に勤めることになったいきさつや、採用された所が静内機関区で、そこは、動力車乗務員になるコースであることを始めて知ったのである。

2、「国鉄一般」について

国鉄には厳しい服務規程があつて、分けても乗務員には、日常生活においても制約されていたことなど。

3、「鉄道線路」について

鉄道線路は我々乗務員の足となるもので、昼夜にわたり線路を守ってくれている保線区員には、常に敬意をはらっていたことなど。

4、「SL (蒸気機関車)」について

関係者にしか分からない不思議な SL 搭載品や 100 本以上の煙突 (菅) があることなど。

5、「DC (ディーゼルカー) について

色や形は同じでも中味は多様なことなど。

6、「EC (電車)・特急電車」について

架線には交流 2 万 V が流れていて竿状の物を持って線路に入ると感電死することや、赤電は日本一の性能を持っていることなど。

7、「その他」について

鉄道をもっと知るために、道内の一日乗降客デストテン、駅間の最低・最短・カタカナ駅名・難読駅名・道内廃止線・道内国鉄の歩み年表・車両基地図・青函トンネル断面図、などの資料を作ってお配りしてみました。

分科会報告

★ 開拓史研究部

第3回 2014/10/23

私設資料館「石狩尚古社」を見学しました。

「石狩尚古社」は、安政3年(1856)に石狩の俳句結社として創設され、全国の俳句指導者との交流を行い、盛んな活動がなされておりました。その名に因んで、「資料館 石狩尚古社」の名称で、中島勝人・勝久父子が私費をもって私設文学資料館を建て、平成元年4月に開館しました。

中には、俳人である鎌田池菱・中島戸方・中島湖菱の残した、短冊、書画、句帳、句雑誌、また、池菱が収集した吉田松陰、山岡鉄舟、勝海舟、山田顕義の書幅や伊藤祐亨、巖谷小波、重野安繹、河野広中の書の掛け軸など膨大な資料が展示されておりました。(「案内パンフレット」より引用)

長時間にわたって懇切にご案内くださいました館長の中島勝久氏に、お礼申し上げます。



★ 文芸サークル

- ・ 今月の例会(11月26日)は、『風立ちぬ』を語る』というテーマで、零戦の設計者堀越二郎をヒントにして創られたとされる宮崎駿の映画『風立ちぬ』と堀辰雄の小説『風立ちぬ』について比較研究すべく、野村氏から基調提言をいただき、話し合う予定です。
- ・ 「茂内スクラック 第1集」の制作中で、来月の例会までに完成させる予定で作業を進めています。

★ データ整理部

- ・ 「知られざる手稲と加賀百万石」の索引が出来ました。
- ・ 「手稲歴史年表」の索引作成作業は順調に進んでいます。併せて、茂内会長の資料集「札幌のむかしばなし」の索引づくりも進行中です。

手郷研クイズ(前田農場一その1)

「知られざる手稲と加賀百万石」に次のような記述があります。空欄に適した名前および数字を入れてください。

当主前田 (1) は、明治 (2) 年旧臣堀嘉久馬等有志者と相謀り、土族授産の目的を以て北海道に事業を計画し、一社を結びて起業社と称した。(1) 私費10万円を出資し、これで経営に当たらせ徐々に移住者もふえ、開墾にもやや見通しをもち、村落も形成したのを機会に、明治 (3) 年梨野舞内村から独立して一村となした。当主の姓にちなみ前田村と呼ぶことにしたのである。(ヒント:「知られざる手稲と加賀百万石」P.25)

会員の広場

昨秋、青森を訪ねた時の個人的な話

稲穂 高木 秀子

「合浦公園」について

—海を知らぬ少女の前に麦藁帽子のわれは両手をひろげていたり—

17歳の寺山修司が自転車の旅で出会った海を知らない山峡の少女に、海の大きさを説明するのに両手を広げて見せた。修司は昭和10年、弘前市生まれ、父は特高で南方に出征するがセレベス島で死亡。母は仕事のため九州へ。そのため修司は青森市で10歳の時から自炊による1人暮らし、後に市内の母方の親戚宅に寄居するようになる。したがって修司の見ていた海はまさしく合浦公園の海ということになる。この公園は春には花見、夏は海水浴場として賑う。晴れた日は函館の島影まで見える。カーブした水平線を見て地球がまるい事を知った子供も多いだろう。それに藤棚や蓮池もみごとである。今は移転したが市民球場や競輪場もあった。公園に隣接して学校が3校あったが昭和20年7月28日の大空襲で2校が焼失。この空襲では市内の19校が罹災した。事前に米軍による空襲の予告ビラが撒かれたが「防空法」により国民学校高等科以上の人は防空従事者として疎開や転住を禁じられていたため、多くの死傷者がでた。過去にはそんな悲惨な歴史もあった。花火大会の日にはねぶたの海上運行というのがある。夜の海にねぶたの灯りと空の花火が映り波間に揺れて幻想的である。空襲のあった同じ海と空である。露店で食べる「みそおでん」は絶品。

「アコーディオンアンサンブル・キサス」を堪能

青森市民文化祭の一端でアンサンブルキサスのコンサートがあった。

会場は市民ホール。エントランスホールのエレベーターの扉は津軽塗。市民の気合十分である。グループ発足は1981年。函館市アコーディオンクラブとのセッションや毎年由市文化団体協議会主催のオータムコンサート、アラスカ会館でのサマーコンサート、他ホテルのロビーコンサート、野外コンサート等々の演奏活動をしている。楽器編成はアコーディオン3名、テナーサクソ、フルート、ギター、ピアノ、ベース、ドラム、パーカッション各1名、ボーカル2名。この日の曲目はプログラム参照。特にすばらしかったのはデイブ・クラークファイブの「ビコーズ」。じつは私の兄(84歳)がピアノを担当している。各パートの譜面づくりや編曲などに忙しかったようだ。このグループのことを書こうと思ったのはメンバーが元市議員や元大学教授、会長は大工の棟梁で全日本アコーディオンコンテストの上位入賞者。年齢も70代や80代が多く、どこか、わが手稲郷土史研究会と似ていなくもない。ということで紹介したくなった。

コンサートの2時間はあっという間に過ぎまし

た。アンコールの「鈴懸の径」では奏者も観客もスイングしていました。

ステージ上、演奏前はおそらくワヤワヤと津軽弁が飛び交っていたに違いないのに…演奏が始まると、音は訛ることなく…音楽は改めて万国共通語であることを実感しました。ブラボー！

次回の予定

次回(12月10日)は、若松幹男氏の「南アフリカものがたり」および沖田紘昭氏の「『2021年の手稲と2071年の手稲』の研究発表を予定しております。

会場は、視聴覚室です。

北海道クイズ

Q1 根室地方の伝説の看板(現在は撤去)

「ジャスコまで直進〇〇km)さて何kmでしょう?

A 110km 日用品の買い出しもラクじゃないですね。

(うんちく北海道より)

Q2 181台。15.8%。は何の数値でしょう?

A 道内の1,000世帯当たりのエアコン所有台数と普及率。全国47位

(うんちく北海道より)

Q3 札幌中心部の区画。1ブロックの1辺どれぐらい?

A 1辺60間(109m)の正方形です。島義勇の発案による。

(うんちく北海道より)

【お詫び】この記事は、第81号に掲載予定で執筆頂いたものですが、訃報などにより緊急に変更せざるを得なくなり、今号の掲載となりました。執筆頂いた高木氏に心よりお詫びいたします。

前田利為侯の葬儀にて

前回の例会では講演・研究発表は1テーマでした。そのため紙面に余裕ができましたので、前田利為侯の長女・酒井美意子の著書『ある華族の昭和史』の中から、一部を紹介します。

第八章 父 — 悲劇の將軍 より

父がボルネオに出征する前夜、私は「きっと帰っていらして」と懇願しながら父の胸に顔を埋めて泣いた。もう再び会う日のないことを予感したのだった。父は遂に「帰る」とは言ってくれなかった。「パパのことをよく憶えておいで」とだけ最後に言ったのだった。

それからかなりの月日、私は夜眠っているときだけが仕合せだった。夢の中では、父は生きていた。「ミミ、作文を見てあげましょう」と言ってくれた。朝、このまま目がさめないようにと固く目を閉じて、私はどれほど泣いたことだったろう。

母は陸軍大将夫人という立場上、人前では決して涙を見せなかったが、遺骨が無言の凱旋をした日、子供だけの前ではじめて弱々しく言った。

「パパは国家の方であったと思ひましようね。これからはマミがパパの分も愛してあげますから ……」

姉弟は母にしがみついて泣き、私が、「マミが、おかわいそう ……」と口走ると、

「パパは、とっておかわいそう ……」と母はとめどもなく涙を流した。

東条首相夫人勝子が真っ先に弔問に駆けつけた。賢夫人の誉れ高い彼女は、玄関を入るや絨緞の上にぐずおれるように両手をつき、「奥様、勿体ないことでございます」と声をふりしぼってむせび泣いた。

その夜、東条首相も側近に囲まれてものものしく訪れた。二階の父の書齋に設けられた祭壇の前に額ずくと、彼は報道陣のカメラのフラッシュが一段落するまでずっと頭を下げていた。

東条英機は母の前に歩み寄ると、「まことに、残念であります」と低い声で悔やみを述べた。傍で万感をこめて彼を凝視する私の目と合うと、東条はメガネの奥の象のように小さな目をしばたき、より低い声で、「お寂しくおなりで ……」と言う。

(中略)

芳賀東部第三部隊長の指揮する三個大隊の儀仗兵の「捧げ銃」とともに哀調込めた「吹なす笛」が葬場に流れる時、導師が霊前に進んで引導ののち、勅使をはじめ各宮家や満州国皇帝のお使いのご代拝が行なわれた。

続いて東条首相が進み出て弔辞を読み始めたが、その声は初めから涙に曇っていた。

「(略) …… 英機、君ト竹馬ノ友タリ。陸軍士官学校ニ於テハ、寢食ヲ同シ、日露ノ役ニ於テハ、同一旅団ニ死生ヲ共ニセリ。爾来、星霜四十年、相携ヘテ軍務ニ鞅掌シ、交情常ニ渝ハルコトナク、互、許スニ信ヲ以テシ ……」

東条英機は暫く慟哭ののちに続けた。

「 …… 巨星南溟ニ墜チテ再タ還ラズ。哀痛何ソゾ讐ヘン。英機、君ノ声咳ニ接スルコト長ク、今、霊位に咫尺シテ猶生クルガ如キ ……」彼は遂に絶句した。

私は顔を蔽った首相を、「あの人もかわいそう」と涙ながらに思った。